

劉白聯句訳注稿（十七）

橘 英 範

はじめに

本稿では、前号に引き続き、⑨「喜遇劉二十八偶書兩韻聯句」の語
積の最初の部分を記すこととする。

⑨「喜遇劉二十八偶書兩韻聯句」（つづき）

【語釈】

1・2 病來佳興少、老去舊遊稀

〔病來〕病氣をしてから。「病みて來」と訓読することも可能。

『舊唐書』の本伝に、この聯句の五年前の大和四年（830）頃のこととして、「度年高くして病ひ多く、上疏して懇ろに機務を辭するも、恩禮彌々厚し。文宗 御醫を遣はして診視せしめ、日に中使をして撫問せしむ（度年高多病、上疏懇辭機務、恩禮彌厚。文宗遣御醫診視、日令中使撫問）」という記述がある。

管見の及んだ限りでは、この記述の他には、裴度がこの頃病氣であったことを示す資料はないようで、裴度のこの「病來」の表現が何か特

定の病氣を指しているのか、またその病氣になったのがいつ頃か、といった詳しいことについては不明である。ただ、『舊唐書』のこの記述からすると、七十一歳という高齢のためもあり、病氣がちであったことは確かのようなのである。

この意味での初盛唐までの用例は未見。

中唐に入つて、韋應物の「答重陽」（陶敏他『韋應物集校注』増訂本五）に「病來 時節を經、起きて見る 秋塘の空しきを（病來經時節、起見秋塘空）」といい、李端の「病後遊青龍寺」（全二八四）に「病來 形貌穢れ、齋沐して 東林に入る（病來形貌穢、齋沐入東林）」というなどの例が見えるようになる。前者は病氣になつてから時がたち秋になつたことを表現した例、後者は病氣をしてから不潔にしていたので沐浴してから寺を訪問することを述べた例。

劉には例がなく、白には元和年間から開成年間に及ぶ詩の本文中に十二例。そのうち、元和一四年（819）の「冬至夜」二首に「老ひ去りて 襟懷 常に瀟落として、病來 鬚鬢 轉た蒼浪たり（老去襟懷常瀟落、病來鬚鬢轉蒼浪）」という例をはじめとする六例が、このこと同じく「老去」と対にする。この、「病來」と「老去」を対にする表現は、

白以前には見られないものであり、裴度はあるいは白居易の表現に学んでこの句を作ったのかもしれない。

ただし、「老」と「病」のみに限れば、この二字を詩中に対の形で用いた例は白以前にもあり、管見の及んだ限りでは、その最初の詩人は、白の敬愛した杜甫のようである。いくつか例があるうち一例を挙げれば、「寄李十二白二十韻」(『詳註』八)に「老ひて吟ず 秋月の下、病ひより起く 暮江の濱(老吟秋月下、病起暮江濱)」という。乾元二年(759)、当時59歳となっている李白の様子を想像した二句。

なお、白の「病來」の例のうち、この聯句に先立つ大和五年(831)の劉白唱和詩「和令狐相公寄劉郎中、兼見示長句」(『別後』)に「別後 縦ひ吟ずるも 終に興少なく、病來 飲むと雖も 歡多からず(別後縦吟終少興、病來雖飲不多歡)」という例は、「病來」と対になった「別後」の句の方に用いられてはいるが、この句と同じく病と「興」が「少ないこと」を関係づけた例といえるだろう。

〔佳興少〕風流な趣はすっかり少なくなってしまった。

〔佳興〕は佳なるおもむき。ここでは具体的には、文酒の会を開くというような風流心のことをいうのであろう。このことば、唐までの用例は未見。

唐に入っても、初唐の例は見えないようで、盛唐になって、蔣注も引く王維の「崔灑陽兄季重前山興」(趙本三)に「秋色 佳興有り、況んや君が池上の間かなるをや(秋色有佳興、況君池上閒)」といい、李白の「答王十二寒夜獨酌有懷」(王本一九。ただし偽作説もある)に「昨

夜 吳中の雪、子猷 佳興發す(昨夜吳中雪、子猷佳興發)」というなどの例が見られるようになる。前者は秋の風景が持つ興趣について「佳興」の語を用いた例、後者は王徽之が雪の日に戴逵を訪ねて会わずに帰ったという有名な故事を踏まえて、雪に触発されて起こった風雅の心について用いた例。

盛唐以後も用例はあまりなく、劉にも白にも用例が見られない。

〔老去〕年を取って。老いさらばえて。【担当者】の部分で述べた通り、裴度はこの年七十一歳であった(劉白および李紳は六十四歳)。

唐までの用例としては、陸機の「董逃行」(『樂府詩集』三四)に「於今知此有由、但爲老去年適(今に於て此の由有るを知る、但だ老ひ去りて年の適くるが爲なりと)」という例が見えるのみのようだ。

その後は唐に入るまで詩の用例は見えず、唐になって、王績の「在京思故園、見鄉人問」(全三七)に「旅泊 年歳多く、老ひ去りて 廻るを知らず(旅泊多年歳、老去不知迴)」といい、李白の「相逢行」(王本六)に「當年 行樂を失すれば、老ひ去りて 徒らに傷悲せん(當年先行樂、老去徒傷悲)」というなどの例が見えるようになる。前者は旅暮らしの中で年老いたことを嘆くのに用いた例、後者は若いうちに樂しむべきだという思いを述べるのに用いた例。

盛唐詩ではまた、杜甫の「九日藍田崔氏莊」(『詳註』六)に「老ひ去りて 悲秋 強ひて自ら寛うし、興來たりて 今日 君が歡を盡くす(老去悲秋強自寬、興來今日盡君歡)」の例があり、『唐詩選』にも採られていて非常に有名である。杜甫にはさらに「十二月一日三首」

其三(同前一四)に「春來れば懷ひを開かんと準擬すること久しく、老ひ去りて 親知 面を見ること稀なり(春來準擬開懷久、老去親知見面稀)」と、(こ)こと同じく、「老去」と「稀」の語を用いて、友人(親類)たちと会わなくなることを表現する例もある(ただし、ここは友人たちの死を指しているのに対し、杜甫の例は広く会う機会の減少を指しているようである)。

劉には長慶年間(一説に元和年間)から開成年間におよぶ三例(0155・0878・0815)の用例がある。一例を挙げれば、長慶四年(824。一説に元和一三〇四年〔818〜819〕)の「武昌老人説笛歌」0155に「如今 老ひ去りて 語尤も遅く、音韻の高低 耳知らず(如今老去語尤遲、音韻高低耳不知)」という句がある。年を取って言葉も出づらく耳も遠くなり、笛の音が聞き分けられなくなった老人の描写に用いた例。

白には元和年間から開成年間に至る詩の本文中に三三例、そのうち大和六年(832)の「聞樂感鄰」2712に「老ひ去りて 親朋 零落し盡くし、秋來 弦管 感傷多し(老去親朋零落盡、秋來弦管感傷多)」といい、大和七年(833)の劉白唱和詩「早春醉吟寄太原令狐相公蘇州劉郎中」3061に「別來 新詩敵に遇ふこと少なく、老ひ去りて 舊飲徒に逢ひ難し(別來少遇新詩敵、老去難逢舊飲徒)」という例は、前者は明らかに死のことを指しており、後者は広く機会の減少を述べているようだという違いはあるものの、(こ)こと同じく「老去」の語を用いて旧友(および親類)と会わなくなったことを表現する。

ちなみに、白がこの語を用いて自分のことを表現した最初の例は、元和六年(811)、下邳での「首夏病間」0238に「老ひ去りて 慮おもんはかり

漸やく息まみ、年來たりて 病まひ初めて愈いゆ(老去慮漸息、年來病初愈)」という例。40歳の時から自己を「老去」と表現し始めたということになるうか。

〔舊遊稀〕昔からの友人は稀になった。年をとったため、亡くなつてしまった友人が多いことを言うのであろう。

〔舊遊〕は昔の遊び、また昔ともに遊んだ友人、ここでは後者の意。古い用例は少なく、『魏書』禮志一に「後二年(明元帝の神瑞元年〔414〕を指す)、白登の西、太祖舊遊の處に於いて、昭成・獻明・太祖の廟を立つ(後二年、於白登西、太祖舊遊之處、立昭成・獻明・太祖廟)」という例あたりが古いものである。これは昔の遊びの意。

唐までの詩中にも一例しか見えない。何承天の「鼓吹鏡歌十五篇」其十三「臨高臺篇」(『宋書』樂志四)に「迅風を馳せて、炎州に遊ぶ。言わが桑梓を願ねがひ、舊遊を思ふ(馳迅風、遊炎州。願言桑梓、思舊遊)」の句がある。神仙の様子を描いた詩で、風に乗って遠くまで旅をしつつ、故郷を思う場面。この詩の場合の「舊遊」は、昔の遊びの意でも旧友の意でも解せそうだ。

唐に入って、多くの例が見えるようになり、王績の「薛室室收過莊見尋、率題古意以贈」(全三七)に「舊遊 儻もし暇多ければ、同ともに此に紛拏まを釋とけ(舊遊儻多暇、同此釋紛拏)」といい、蔣注も引く李白の「謝公亭」(王本二二)に「今古 一に相ひ接し、長歌して 舊遊を懷なぶ(今古一相接、長歌懷舊遊)」という。前者は詩題にいう薛收を「舊遊」の語で呼んだ例、後者は謝朓の生前の遊びについて用いた例。

劉には、長慶年間からの詩中に五例(0196・0207・0674・0959・0879)、いずれもこの聯句に先立つ例で、そのうち大和五年(831)の「贈樂天」0674に「一別より 舊遊盡き、相ひ逢ひて 俱に涕零す(一別舊遊盡、相逢俱涕零)」という例は、劉白唱和詩の例。柴氏は昔の遊びの意で解するが、蔣注・陶注等は旧友の意で解している。旧友の意であれば、こと似た例ということになる。

白には元和年間から會昌年間にいたる詩中に二五例。そのうち、元和四年(809)の「送王十八歸山、寄題仙遊寺」0715に「惆悵す 舊遊 復た到る無きを、菊花の時節 君が廻るを羨む(惆悵舊遊無復到、菊花時節羨君迴)」という例は特に名高い例。かつて仙遊寺に遊んだことを「舊遊」と表現している。

白にはまた、詩題に一〇例の用例があるが、その一つである大和六年(832)の「憶舊遊 舊遊を憶ふ」0505の例は、劉白唱和詩の例。この詩は本文中でも「舊遊を憶ふ、舊遊 安くに在りや。舊遊の人 半ばは白首、舊遊の地 蒼苔多し。江南の舊遊 凡そ幾處ぞ、就中 最も憶ふは 吳江の隈(憶舊遊、舊遊安在哉。舊遊之人半白首、舊遊之地多蒼苔。江南舊遊凡幾處、就中憶吳江隈)」と、くり返しこの詩語を用いている。

主人である裴度が担当した冒頭の四句。その前半の二句は、病気をしてから風雅の心もなくなり、年をとって友人も少なくなつたという、裴度自身の近況を述べている。ただ、それはきつと劉・白・李紳にも共通の思いであろうというつもりもあつたのではないだろうか。

3・4 笑語縦横作、杯觴絡繹飛

「笑語」ともに笑い、語り合うこと。談笑。①の聯句の第九句(張籍担当)「雨語」を「笑語」に作るテキストがあつた。その【語釈】も参照。

古く『毛詩』に二例の用例が見え、小雅「蓼蕭」に「燕して笑語し、是を以て譽處有り(燕笑語兮、是以有譽處兮)」とあり、小雅「楚茨」に「禮儀 卒く度あり、笑語 卒く獲たり(禮儀卒度、笑語卒獲)」とある。前者は諸侯が天子と宴飲して談笑することを詠じたもの、後者は祭祀の際に賓客を饗応し談笑する様子が礼にかなつていたので、神靈も安んじて降臨することを述べたもの。

唐までの詩においては、王粲の「贈士孫文始」(『文選』二三)に「既に禮義に度あり、卒く笑語を獲たり(既度禮義、卒獲笑語)」といい、何遜の「別沈助教」(李伯齊『何遜集校注』修訂本二)に「一朝 笑語に別るれば、萬事 疇昔と成らん(一朝別笑語、萬事成疇昔)」というなどの例が散見する。前者は『毛詩』小雅「楚茨」の表現に基づきつつ、士孫萌と親しく交際した日々を追懐する中に用いた例、後者は沈峻(一説に沈繇)との別離の後には、全てが昔の思い出になるだろうと想像する中に用いた例。

唐に入って、初唐には例がなく、盛唐になって例が多くなる。王維の「班婕妤三首」其三(趙本一三)に「總て春園の裏に向かひ、花間笑語の聲あり(總向春園裏、花間笑語聲)」という例は、寵愛を失つて残された班婕妤が、春園の花の中の天子と宮女の談笑の声を聞くというもの。また、孟浩然の「臨渙裴明府席、遇張十一・房六」(佟培基『孟浩然詩集箋注』下)に「笑語 今夕に同じく、輕肥 往年に異

なれり（笑語同今夕、輕肥異往年）」というのは、詩題にいう張某・房某が、今では「輕裘肥馬」の見違えるような姿になったという変化と、かつてと変わらぬ今宵の談笑の楽しさを対にした例。

劉には元和年間から開成年間におよぶ七例、そのうち長慶四年（824）または翌寶曆元年（825）の作とされる「歷陽書事七十韻」1001に「喜びを助けて 杯盤盛んに、機を忘れて 笑語句たり（助喜杯盤盛、忘機笑語句）」という例は、和州での崔羣との宴席の情景を描いたもので、談笑の声の大きさを、「杯觴」ではないが、「杯盤」の盛んさと対にしており、ここ似ている。

白にはいずれもこの聯句に先立つ四例（0312・0820・1328・3064）、そのうち「洛中春遊、呈諸親友」3064に「笑語 閑日を銷し、酣歌老身を送る（笑語銷閑日、酣歌送老身）」という例は、この聯句の二年前の大和七年（833）、洛陽での友人たちとの交遊について表現するのに用いた例。

「縦横作」思うままに行なう。上の「笑語」を承けて、存分に笑い、語り合うことをいう。

「縦横」、たてとよこの意もあるが、ここでは思いのまま、自由自在の意。古く『荀子』王制に「而うして縦横の事を爲し、偃然として兵を案めて動く無く、以て夫の暴國の相ひ卒つを觀るなり（而爲縦横之事、偃然暴兵無動、以觀夫暴國之相卒也）」という例も、自在のはかりごとを指しており、この意味の例のようである。

文学作品においても、宋玉の「高唐賦」（『文選』一九）に「鼉鼉鱉鱉

鮪、交積縦横す（鼉鼉鱉鱉、交積縦横）」という古い例がある。水中にいる亀の仲間や魚類が重なり合うことを表現した例で、たてとよことも自在とも介せる例といえようか。

唐までの詩においては、劉楨の「贈五官中郎將四首」其四（『文選』二三）に「君侯 壯思多く、文雅 縦横に飛ぶ（君侯多壯思、文雅縦横飛）」といい、顔延之の「秋胡詩」（同前二）に「離獸 荒蹊に起り、驚鳥 縦横に去る（離獸起荒蹊、驚鳥縦横去）」というような例がある。前者は君侯（曹丕）の文雅の思いが自在に飛びめぐるといふ表現、後者は驚いて飛び立った鳥がほしほしに飛び回るといふ表現。

唐に入り、魏徵の「述懷」（全三）に「縦横 計は就らざるも、慷慨 志は猶ほ存す（縦横計不就、慷慨志猶存）」というのは、『唐詩選』の巻頭を飾る有名な例。ただし、これは蘇秦・張儀の合従連衡の故事を踏まえて用いられたもの。『唐詩選』にはまた、柴注も引く盧照鄰の「長安古意」（全四）に「玉輦 縦横 主第に過り、金鞭 絡繹として侯家に向かふ（玉輦縦横過主第、金鞭絡繹向侯家）」という自在の意味の例もある。ことと同じく「絡繹」の語と対にしている。

盛唐の例も挙げれば、杜甫の「戲爲六絶句」六首其一（『詳註』一一）に「庾信の文章 老ひて更に成り、雲を凌ぐ健筆 意ひ縦横（庾信文章老更成、凌雲健筆意縦横）」の句がある。

劉には「縦横」の例はなく、白には一例のみ。『文苑英華』三三六に残る補遺作品の「勸酒」3684に「十稔を逾えずして 台衡に居り、門前の車馬 紛として縦横（不逾十稔居台衡、門前車馬紛縦横）」の句がある。高位に登ったためたたくさんの訪問客が訪ねて来るようになった

ことを、門前を縦横に走る車馬によって表現した例。補遺作品のため制作年代は未詳。なお、『文苑英華』は二首の連作とし、この詩を其一、「勸酒」2239を其二とする。もし同時の作であるとすれば、大和元（二年（827～828））の作ということになる。

〔杯觴〕さかずき。「觴」もさかずきの意。

古書には例が見えないようだが、詩では古く曹植の「當來日大難」（『樂府詩集』三六）に「別るるは易く 會ふは難し、各々 杯觴を盡くせ（別易會難、各盡杯觴）」の例が見える。ただ、唐までの詩では、その後は作者不詳の晉の西曲歌の「月節折楊柳歌十三首」其九「九月歌」（同前四九）に「甘菊 黃花を吐き、杯觴の用なること無くんば非ず（甘菊吐黃花、非無杯觴用）」という例が見えるのみのようである。

唐に入っても、初盛唐から中唐大曆期の詩人までは例が見えず、元和期の元劉白に至って再び用いられるようになる。元稹の元和六年（811）の「酬竇校書二十韻」2778に、竇葦と自らの友情を、仲の良い鳥とされるカモメとサギに喩えつつ、「鷗鷺 元より相ひ得て、杯觴 毎に共に傳ふ（鷗鷺元相得、杯觴每共傳）」と、ともに杯を交わす喜びを詠ずる例がある。

劉の用例は一例、この聯句の三年後の開成三年（838）の劉白唱和詩「和牛相公遊南莊、醉後寓言、戲贈樂天、兼見示」0797に、「白家 唯だ有り 杯觴の興、頭盤を把りて 少年を打たんと欲す（白家唯有杯觴興、欲把頭盤打少年）」の句がある。この「杯觴興」を柴注は食器を箸で叩いて調子を取ることと解されるが、単に杯によって酒席を表現したと

も解せそうである。

白には元和末年から開成年間に及ぶ六例。一例を挙げれば、「秋日與張賓客・舒著作同遊龍門、醉中狂歌、凡二百三十八字」2908に「暫く杯觴を停めて 吟詠を輟めよ、我に狂言有り 君試みに聴け（暫停杯觴輟吟詠、我有狂言君試聽）」という。

〔絡繹飛〕（杯が）次々と飛ぶ。痛飲していることを表現したもの。「絡繹」は連なる形容。「駱驛」に同じ。

『漢書』王莽傳下に「吏民の義を以て錢穀を入れて作るを助くる者、道路に駱驛たるに及ぶ（及吏民以義入錢穀助作者、駱驛道路）」とあり、その顔師古の注に「駱驛は、絶えざるを言ふ（駱驛、言不絶）」という。九廟を建築するに当たって寄付をする吏民が道に列をなしたことをいう。

また、文学作品においても、後漢の張衡の「南都賦」（『文選』四）に、三月上巳の修禊の賑わいを表現して、「男女 妓服して、駱驛繽紛たり（男女妓服、駱驛繽紛）」というなどの例がある。

詩における用例にも、古く「古詩爲焦仲卿妻作」（『玉臺新詠』一）に「語を交へて 速かに装束し、駱驛たること 浮雲の如し（交語速装束、駱驛如浮雲）」という例がある。婚礼の道具を運ぶ行列が続くのを雲に喩えた表現。なお、この「駱驛」を『樂府詩集』七三では「絡繹」に作っている。唐までの詩においては、ほかに西晉の張華の「輕薄篇」（『樂府詩集』六七）に、「賓從 煥として絡繹たり、侍御 何ぞ芬葩たる（賓從煥絡繹、侍御何芬葩）」というなどの例がある。贅沢な貴族の賓客や

召使いの多さを表現した例。

唐代には、先にあげた駱賓王の例のほか、陳子昂の「萬州曉發、放舟乘漲、還寄蜀中親朋」(全八四)に、「蒼茫として 林岫轉じ、絡繹として 漲濤飛ぶ(蒼茫林岫轉、絡繹漲濤飛)」といい、李白の「答杜秀才五松見贈」(王本一九)に「飛箋 絡繹として 明主に奏し、天書降問し 恩榮を迴す(飛箋絡繹奏明主、天書降問迴恩榮)」というような例がある。前者は連続して波しぶきが跳ね上がることを表現したもの、後者は劍南節度使がたびたび上奏文をたてまつって詩題にいう杜秀才(未詳)を推薦したことを表現したもの。

また、杜甫の有名な「麗人行」(『詳註』二二)にも「黃門 鞞くつばみを飛ばして 塵を動かさず、御廚 絡繹として 八珍を送る(黃門飛鞞不動塵、御廚絡繹送八珍)」という例がある。號國夫人らの宴会の宮中から続々と珍味が届けられることを描写した句であるが、この「絡繹」は「絡」に作るテキストもある。

一白には例がなく、劉には二例。元和元々九年(806〜814)の朗州司馬時代の「遊桃源一百韻」101に「觀る者 皆な次を失ひ、驚追して紛として絡驛たり(觀者皆失次、驚追紛絡驛)」といい、先に「笑語」の例として引いた「歷陽書事七十韻」101に「絡繹として 主人問ひ、悲歡 故舊の情(絡繹主人問、悲歡故舊情)」という。前者は、仙人が突然姿を消してしまったため、周りにいた人々が驚き、次々と後を追いかけようとする様子を描写した例、後者は、崔羣がたびたび使者を派遣して、道中の劉の様子を尋ねてくれたことを表現した例。

主人である裴度が担当した冒頭の四句のうちの後半部分。近況を述べた前の二句に続き、宴席の状況を描写した二句。思うさま笑い語り、次々に杯をほす様子が歌われている。

最初の二句で近況を述べた後、次の二句ではすぐに宴席の描写となっていて、飛躍があるようにも感じられ、これまでの聯句のような場面を設定し、状況を説明するような始まり方とやや異なっているようにも思われる。ただ、前半二句で描かれていた近況は、病氣となり年もとつて、友人と楽しむ機会もないという嘆きであったから、ここで宴席の様子が描かれているだけで、このような楽しい宴会が開けたという喜びが暗に感じられる表現となっている。恐らく裴度は、劉禹錫との再会の喜びを直接を詠じることなく、暗示しようとしたのであろう。裴度が再会の喜びを詠じることにより、主人として他の参加者を代表して劉に対する歓迎の意も表明しているといえよう。

5・6 清談如水玉、逸韻貫珠璣

〔清談〕清らかな談話。柴注も指摘することく、魏晉の時代に竹林の七賢を代表とする知識人が老莊思想に基づいて行ったいわゆる清談を意識し、この宴会での会話をそれに比した表現であろうか。

ことばの用例も後漢末〜魏晉の頃から見られるようで、『後漢書』臧洪傳に「前刺史焦和 好んで虚譽を立て、清談を能くす(前刺史焦和好立虚譽、能清談)」といい、『三國志』魏書・劉劭傳に引く、夏侯惠が劉劭を推薦した上奏文に「臣數々其の清談を聽き、其の篤論を覽る(臣

數聽其清談、覽其篤論」とある。

詩における用例も同じ頃から見られ、先に「縦横」の語釈に其四を引いた、劉楨の「贈五官中郎將四首」其二(『文選』二三)に「清談して日夕を同じうし、情眇して憂勤を絞ぶ(清談同日夕、情眇絞憂勤)」という。蔣注も引く例で、病気の折りに見舞いに来てくれた曹丕との語らいを詠じるのに「清談」の語を用いている。

唐までの詩の例をもう一例挙げれば、何遜の「酬范記室雲」(前掲『校注』修訂本一)に「清談 共にする理莫く、繁文 徒らに玩ぶべし(清談莫共理、繁文徒可玩)」という。范雲と会えないことを清談ができないと表現している。

唐に入り、崔融の「哭蔣詹事儼」(全六八)に、生前の蔣儼の文章と談話を表現して、「逸翰 金相發し、清談 玉柄揮ふ(逸翰金相發、清談玉柄揮)」という句がある。「玉柄」は比喻ではなく、談話の際に持つ扇子を指すことではあるが、「玉」の文字と関連して「清談」の語を用いており、さらにそれを「逸〇」という形の語と対にした例といえる。

さらに例を挙げれば、杜甫の「贈虞十五司馬」(『詳註』一〇)に「爽氣 金天豁く、清談 玉露繁し(爽氣金天豁、清談玉露繁)」というのは「玉」字とともに用いる例、清談の比喻として「玉露」の語を用いており、その点では崔融の例よりもさらにこと近い。また、同じく杜甫の「送高司直尋封蘭州」(同前二一)に「清談 老夫を慰め、開卷佳句を得たり(清談慰老夫、開卷得佳句)」というのは、「清談」と詩作とを対にして用いた例。

劉にはほかにこの聯句に先立つ二例。永貞元年(805)の作とされる「古詞二首」其二0024に「簿領するは 乃ち俗士、清談 信に古風(簿領乃俗士、清談信古風)」といい、大和二年(828)の「夏日寄宣武令狐相公」0033に「近來 溽暑 亭館を侵し、應に覺ゆべし 清談の 綺羅に勝るを(近來溽暑侵亭館、應覺清談勝綺羅)」という。前者は公文書を扱う事務仕事と「清談」を対比して用いた例、後者は「近頃蒸し暑いので、美女との遊びよりも、私との『清談』の方がよいとお感しでしょう」と戯れた例。

白に二例は、ともにこの聯句の後の例。一つは、開成元年(836)の「贈談客」0033に「上客の清談 何ぞ臺臺たる、幽人の閑思 自づから寥寥たり(上客清談何臺臺、幽人閑思自寥寥)」という例。次の句に「請ふ君 説くを休めよ 長安の事(請君休説長安事)」というように、この「清談」は皮肉であり、ことは用法が少し異なる。

もう一例は、會昌元年(841)の「會昌春連宴即事」劉0827・白3735の白居易担当部分に「麗句 珠玉を輕んじ、清談 管絃に勝れり(麗句輕珠玉、清談勝管絃)」という例。自分たちの談話を「清談」と表現して、詩作を玉に喩える句と対にしており、劉のこの句が影響を及ぼしている可能性がある。

上述のように「清談」の語は⑭の聯句の第一六句に用いられている。

〔如水玉〕水晶のようだ。「清談」の清らかさを水晶に喩えた表現。「水玉」は水晶の異名。

「水玉」の語、古く『山海經』に多くの例が見える。一例を挙げれば、

南山經の「堂庭山」の条に、「又た東のかた三百里を、堂庭の山と曰ひ、椶木多く、白猿多く、水玉多く、黄金多し（又東三百里、曰堂庭之山、多椶木、多白猿、多水玉、多黄金）」という。その郭璞の注には、「水玉は、今の水精なり。相如の上林の賦に曰く、水玉磊砢、と。赤松子の服する所、列仙傳に見ゆ（水玉、今水精也。相如上林賦曰、水玉磊砢。赤松子所服、見列仙傳）」とある。

郭璞が引く司馬相如の「上林賦」（『文選』八）に「蜀石黄磈、水玉磊砢（蜀石黄磈、水玉磊砢）」というのは、上林苑を流れる川の描写、この部分の張揖の注にも「水玉は、水精なり（水玉、水精也）」とある。また、同じく郭璞が触れる『列仙傳』の記述は、赤松子の条に「赤松子なる者は、神農の時の雨師なり、水玉を服して、以て神農に教ふ（赤松子者、神農時雨師也、服水玉、以教神農）」という。

唐までの詩において、「水玉」でまとまる形の例は二例のみ、ともに東晉の庾闡の「遊仙詩」十首（『藝文類聚』七八）に見える例で、其三に「邛疏 石髓を鍊り、赤松 水玉に漱く（邛疏鍊石髓、赤松漱水玉。なお、邛を『藝文類聚』は功に作るが、『古詩紀』三二に基づき改めた。邛疏は仙人の名）」といい、其六に「滄として水玉に漱げば心は玄なり、故に靈化の自然を能くす（滄漱水玉心玄、故能靈化自然）」という。其六も「赤松 霞霧 煙に乗ず（赤松霞霧乘煙）」の句から始まっており、二例とも赤松子の故事を用いたものといえる。

唐に入り、劉禹錫に先立つ例は、杜甫の二例のみ。一つは「熱三首」其一（『詳註』一五）に「寒き水玉と爲らんことを乞ひ、冷たき秋菰と作らんことを願ふ（乞爲寒水玉、願作冷秋菰）」という例は、暑さに苦

しむあまり、冷たいものになりたいたと願う例。ただし、「寒水の玉」「冷秋の菰」とまとまるとする解釈もある。もう一例は、「園人送瓜」（『詳註』一九）に「沈浮 水玉亂れ、愛惜すること 芝草の如し（沈浮亂水玉、愛惜如芝草）」という例で、これは水に浮き沈みする瓜を水晶に喩えた例。

「水玉」の語、白には用例がなく、劉の例もこれのみ。この語、紹興本は「冰玉」に作る。こちらであれば、氷や玉の意となろうか。『箋證』および高注は「水玉」が正しいとするが、蔣注・陶注は「冰玉」の本文を採用し、清らかなことの比喩である旨注する。

「冰玉」は古書には見えず、また用例もごく少ない。晉の張林の「陳夫人碑」（『藝文類聚』一八）に「婦德 既に備はり、母道も亦た踐み、志 冰玉より厲しきも、厥の徳は 顯はるる靡し（婦德既備、母道亦踐、志厲冰玉、厥徳靡顯）」という辺りが古い例のようである。これは単に清らかなばかりでなく、厳しいというニュアンスを含む例。

また、先に引いた赤松子の「服水玉、以教神農」を『搜神記』一は「冰玉散を服して、以て神農に教ふ（服冰玉散、以教神農）」に作っている。『列仙傳』等の記述から「水玉」の方が正しいとされているようだが、唐代にどうであったかは不明にしても、「冰玉散」の本文で伝えられたものがあることは確かであろう。

唐までの詩で「冰玉」でまとまる例はないようだ。唐に入り、初唐には例がなく、盛唐にも一例のみ、李白の「寄遠十二首」其十二（王本二五）に「君が 冰玉清迥の明心を憐れむ、情は極まらず 意は已に深し（憐君冰玉清迥之明心、情不極兮意已深）」という句

がある。これは女性の純粋な愛情を「冰玉」に喩えた表現。

中唐大曆期の詩人から例が増える中で、盧綸の「酬崔侍御早秋臥病書情見寄、時君亦抱疾在假中」(全二七七)に「地に擲つ金聲 信に之れ有り、瑩然たる冰玉 清詞に見る(擲地金聲信有之、瑩然冰玉見清詞)」という例は、文章の清らかさを「冰玉」によって比喩した例。

劉には例がなく、白に一例、元和九年(814)の「夢裴相公」0460に「彷彿たり 金紫の色、分明なり 冰玉の容(彷彿金紫色、分明冰玉容)」という句がある。夢で見た今はなき裴相のすがすがしい容貌を「冰玉」と表現したもの。

〔逸韻〕①の聯句第十五句(崔羣担当)に見えた。その【語釈】参照。そこにも指摘したように、①の聯句の場合は、裴度を謝安に喩えた表現の中で用いられており、謝安は詩人といふべき人物ではないから、高尚な趣といった広い意味で用いられたと思われるが、ここでは、下に「貫珠璣」と表現していることからして、すぐれた詩句のことを指すと思われる。具体的には、この宴会で作られた詩やこの聯句そのもののことをいうのであろう。なお、劉白の例も全て詩について用いたものであった。

ここでは、この聯句の注に引かれている用例を補っておこう。

蔣注および高注、何承天の「鼓吹鏡歌十五篇」其一「朱路篇」(『宋書』樂志四)に「逸韻 天路に騰がり、頽響 城阿に結ぶ(逸韻騰天路、頽響結城阿)」というのを引く。これは美しい音楽のことを指すようである。

柴注『宋書』謝靈運傳論に「平臺の逸響を綴り、南皮の高韻を採る(綴平臺之逸響、採南皮之高韻)」というのを引く。潘岳と陸機の文学を称えた部分で、梁孝王の平臺に侍した司馬相如と魏文帝曹丕の南皮に陪した建安文人の文学に喩えたもの。

〔貫珠璣〕玉を貫いてつなげたようだ。文章の美しさの表現。なお、⑦の聯句の第二十七句(白担当)に「珠貫」の語が見えた。その【語釈】も参照。

「珠璣」は丸い真珠と四角い真珠。『說文解字』玉部に、「珠は、蚌の陰精なり(珠、蚌之陰精也)」、「璣は、珠の圓かならざる者なり(璣、珠不圓者也)」という。あるいは「璣」小さな珠ともいう。

古くからあることばで、柴注も引く『莊子』列禦寇に「吾れ天地を以て棺槨と爲し、日月を以て連璧と爲し、星辰を珠璣と爲し、萬物を齋送と爲す(吾以天地爲棺槨、以日月爲連璧、星辰爲珠璣、萬物爲齋送)」とある。死に臨んだ莊周が立派な葬儀を準備する弟子たちに述べたことば。ここでは星を葬儀の時に用いる宝玉である珠璣に喩えている。

また、『戰國策』楚策三に「黄金 珠璣 犀象は楚に出づ、寡人晉國に求むる無し(黄金珠璣犀象出於楚、寡人無求於晉國)」とある。宝物は全て楚に産することを述べた楚の懷王のことば。宝物の代表例の一つとして挙げられている。

文学作品の例としては、東方朔の作とされる『楚辭』「七諫」「諷諫」には、「玉と石と 其れ賈を同じうし、魚眼と珠璣とを貫く(玉與石其同賈兮、貫魚眼與珠璣)」と、「貫」の表現とともに用いられ、「珠璣」は「魚

眼」と対比され「玉」と並べられる貴重なものとして描かれている。

また、揚雄の「長楊賦」(「文選」九)にも「是に於て後宮 璫瑁を賤しとして珠璣を疏んじ、翡翠の飾りを却けて、彫琢の巧みを除く(於ては後宮璫瑁而疏珠璣、却翡翠之飾、除彫琢之巧)」という。漢の文帝の後宮が質素であることを表現した部分で、やはり宝玉の代表の一つとして用いられている。この部分の李善注に引く『字書』に、「璣は、小珠なり(璣、小珠也)」という。

以上のように古い例はあるが、唐までの詩には用例が見えないようだ。唐に入り、初唐には、上官昭容(婉兒)の「遊長寧公主流杯池二十五首」其八(全五)に、「珠璣の飾りを玩ばず、仍りて仁智の情を留む(弗玩珠璣飾、仍留仁智情)」といい、喬知之の「定情篇」(全八一)に「妾に 秦家の鏡有り、寶匣 珠璣を装(妾有秦家鏡、寶匣裝珠璣)」というなどの用例が見える。前者は「長楊賦」と同じく、長寧公主が驕奢を避けたことを表現するのに用いられ、後者は鏡の箱の飾りを描写するのに用いられている。

つづく盛唐および中唐大曆期の詩人には例がなく、中唐元和期の詩人になって、再び例が見られるようになる。韓愈の「送靈師」(「韓昌黎詩繫年集釋」二)に「職を失ひて 筆を把らざるに、珠璣 君が爲に編む(失職不把筆、珠璣爲君編)」というのはその一つ。李吉甫らが、中央の官職を失ってからは、筆を手にして文才を発揮することもなかったのを、靈師のためには美しい文章を綴ったことを述べたもの。

なお、晩唐になるとさらに多くの用例が見られるようになる。高注は、そのうち、杜牧の「新轉南曹、未敘朝散、初秋暑退、出守吳興、書此篇、

以自見志」(「樊川詩集注」三)に「一杯 幕席を寛うし、五字 珠璣を弄す(一杯寬幕席、五字弄珠璣)」というのを引く。吳興すなわち湖州刺史として赴任するに当たり、赴任先では詩酒の楽しみを味わおうと表現する中に用いられた例。

劉にはほかに、詩中に二例、いずれもこの聯句に先立つ例で、一つは、元和元(九年(806)814)の「蒲萄歌」0313に「繁葩 組綬結び、懸實 珠璣蹙む(繁葩組綬結、懸實珠璣蹙)」と、ブドウの実を美しい真珠に喩えた例。もう一つは、大和五年(831)の「裴祭酒尚書見示春歸城南青松塢別墅、寄王左丞・高侍郎之什、命同作」0015に「情を含んで 林壑に謝し、贈るに酬いて 珠璣を駢ぶ(含情謝林壑、酬贈駢珠璣)」と、裴通の作に唱和した王起(二説に王播)と高鉞(高鉞)兩名の詩を並んだ明珠に喩えた例で、このこと似ている。

白には用例がない。

主賓として二番目を担当した、劉禹錫の四句のうちの前半部分。裴度の後半の二句で語り合い杯を交わす喜びが詠じられていたのを承けて、劉は、宴席における高雅な会話と、華麗な詩句とを、美しい比喻によって描写しているといえるだろう。この二句は、客として、列席者の風雅を称賛し、感謝の意を表するものとなっており、主人を称える次の二句へと連なっている。